

---

# いい加減にしてください

石子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いい加減にしてください

### 【Nコード】

N6129D

### 【作者名】

石子

### 【あらすじ】

急いでいるのに、しつこく呼び止められた僕は、「いい加減にしてください」と怒鳴ってしまう。そこから少し奇妙なことが起こって…

いい加減

- 1、ほどよいところ
- 2、すじみちがとおらず、でたらめな様子
- 3、徹底しない様子

「いい加減にしてくださいっ！」

僕は思わず怒鳴っていた。相手が女性なので怒鳴るつもりなどなかったが、あまりのしつこさに我慢の限界を越えてしまった。

理由はいたって単純。会議に遅れそうなので半ば走るように歩いていた僕に、いきなりこの見ず知らずの女性が「一緒にお茶でも飲みませんか」などと言って近づいて来て僕の腕をつかみ、近くの喫茶店に引っ張って行くこうとするのだ。

断ってその場を去ろうとしたが、女性の方は腕を放してくれる気配もない。「急いでいる」と言っても耳を貸そうともしない。

そこで怒鳴ってしまったわけだった。

でもこの女性、見た目はごく大人しそうで知的な感じなのでこんな常識はずれな行動をするようには見えないのだが……。

などと思いつつも一度女性の方を見ると、怒鳴られて一瞬驚いたような顔をした彼女だったが、急に笑顔になった。

……なんだ？

その笑顔はとても晴々としていてうれしそうだった。まるで僕が怒鳴るのを待っていたようにも見える。

そして彼女はくると踵を返し、もう一刻も早く僕から離れたいというような速さで人込みに紛れて行ってしまった。

なんだっただ……？

僕は呆気にとられて、その女性が去って行った方をしばらく眺め

ていた。

ただの変な女……。

それだけでは済ませられない気がして、なんだか不安になった。

「馬鹿者！ あれほど遅れるなど言っておいたのに遅刻しよって！  
課長の声が耳にささる。

「はあ……。すみません」

結局、僕は会議に遅れてしまったのだった。あの女性のせいでもあるけれど、あの後タクシーでも使っていれば間に合うような時間だったのだが……。

何故かもうどうでもよいという気分になってしまい、のんびりと歩いて行った結果だった。

「まあまあ、課長。こいつだつてたまには遅れることもありますよ。今まで一度も遅刻したことなかったんですから、少し大目に見てやってくださいよ」

という先輩の執り成しで、ようやく課長の怒鳴り声から解放された。

「先輩、ありがとうございます」

ひとまず礼を言う。

「いや。それにしてもいつもきちんとしているお前が課長に怒られるなんてめずらしいな」

「はあ。まあ……」

確かに先輩の言う通りだった。僕は几帳面な性格で、仕事上のミスなどほとんどしたことはない。

それが、あの女性に会ってからどうも調子が狂っている……。

今日は何度課長に怒られたろう？ まだ耳がキンキンする。

仕事の手につかずぼーっとしていて怒られ、外回りの途中に喫茶

店に寄っていて帰るのが遅くなって怒られ……。

家に帰っても何も食べる気にならず、ベッドに寝転がってぼんやりしていると、なんだか誰かに見られているような気がした。

部屋の中をぐるりと見回してみる。特に異常はない……。いや。テーブルのところで視線が止まった。

テーブルの上には……なんか……小汚いじいさんが……

僕は、ガバツと起き上がる！

「あ……あ……あの……。あなたは一体……？」

言葉が通じるのかは、はなはだ疑問だったがとりあえずテーブルの上からこちらを見ているじいさんに話し掛けてみた。

じいさんは普通の人間の半分くらいのおおきさで、白いぼさぼさの髪、黒っぽい顔という容姿だった。

「何を驚いておるんじゃ。お前が、わしに来てほしいと思うておったようじゃから来てやったんじゃぞ」

……はあ？

「えっと……。とりあえずあなたは一体何者なんですか？」

「あん？ わしは『いい加減』の神様じゃ」

………？

「なんでそんな人が僕の家にいるんです？」

「今朝までは女に付いとったんじゃが、お前が『いい加減にしてください』と頼むもんじゃからこっちに来てやったんじゃよ」

『いい加減にしてください』……？

つまり、『いい加減な人間にして下さい』ということになるんだろうか？

そう考えると今日の出来事にも説明がつく。つまりはこのじいさんが僕にいい加減な行いをさせていたということだ。

「あの。僕はもういいですから、他の人のところに行ってくれませんか？」

「だめじゃ」

頼んでみたが、あっさり断られた。

困ったなあ。

「どうしてダメなんです？僕はいい加減な奴にはなりたくないんです。あなたにいられると迷惑です」

じいさんが怒り出したらどうしよう、と思ってびくびくしながらもはつきりと言ってみた。でも予想に反して、じいさんはなんだか寂しそうな顔になったので少し心が痛んだ。

「最近、すべてをきちんとかこなさなければ社会から弾き出されてしまうような時代になったと思わんかね。みんなが完璧な人間になろうとする。そんな窮屈な生活に、心の中で音を上げる者が増えてきた。だからわしみたいな神が現れたんじゃ」

そのじいさんの話に、思わず納得してしまった。確かに今の社会はなんでもこなせる人間を求めている。

僕は性格が真面目だから、上司に言われた事はかなりきちんとかなしていると思うし、会社からも重宝がられている。

しかし、そういうのを持續させるのは物凄くしんどい。たまに、仕事が嫌になってもっと手抜きをしたいと思うことがあった。それこそ「いい加減」を求めているということなんだろう。

神様がどんな風にして現れるものなのかは知らないけど、僕のような思いをもっている人がたくさんいたら、この「いい加減の神様」みたいなのがでてきても不思議じゃないのかもしれない。

「おっしゃる通り、完璧であることを押し付けられている人はたくさんいるでしょうね。僕も実はそうですから……」

という僕の言葉にうなずきながら、  
「そうじゃろ。他の奴がわしに頼むまではお前に付いててやるからのお」

じいさんは、満足気にそう言った。

「いい加減にしてください！」

そう怒鳴られて、僕は思わず笑みをこぼす。

そして怒鳴った相手にくるりと背を向けて足早に歩き去った。

なんだかんだ言ってみても、社会で暮らしていくにはいい加減でいるわけにはいかないからな……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6129d/>

---

いい加減にしてください

2010年10月8日15時12分発行